

(惜別)元共産党参院議員・吉岡吉典さん かねで含める異色の質問

朝日新聞夕刊 2009.04.18

よしおか・よしのり 3月1日死去(心筋梗塞(こうそく))80歳 3月7日お別れ会

突然の訃報(ふほう)は、ソウルから届いた。親しかった人の多くが、驚き悲しみ、「でもキッテンさんらしい」と受け止めた。

その日の韓国は、日本の統治下で始まった「3・1独立運動」90周年の記念日。市民団体のシンポジウムで講演し、その後の夕食会で突然倒れた。

共産党の議員としては異色だった。国会質問は、故人の正森成二氏、上田耕一郎氏のような舌鋒(ぜっぽう)ではなく、お国言葉の出雲弁でかねで含めるように話す。野党議員は官僚の事前の「質問取り」にできるだけ手の内を見せないものだが、時間をかけ丁寧に説明した。

「答弁する人に、こちらの狙いを正確に理解し、一緒に考えて欲しい。だから私の質問は『追及が甘い』と言われたよ」と、引退後に苦笑していた。

外務省が好きだとも語った。日米同盟が何より大事な外務省と、安保反対を掲げる共産党とでは水と油ではないか。だが、党機関紙「赤旗」の記者だった若い頃、取材に丁寧に応じて「自分を育ててくれた」人たちが忘れられないと、次々に幹部の名前を挙げた。

こんなスタイルが時に疎まれたのか、党生活は順風満帆だったとは言い難い。赤旗編集局長や党政策委員長を務め、最高指導部である常任幹部会委員に上り詰めたが、途中で外された。3期務めた参院議員も、1期で引退に追い込まれそうになったとも聞く。それでも「良くも悪くも日本の社会を映した党。むしろ穴だらけの党であって欲しい」が口癖だった。

歴史問題や外交・安全保障がライフワークだった。ソウルでの最後の講演で「日本には3・1運動のような誇るべき記念日がない。日本が(かつて)朝鮮から何を学んだか、それを学ぶ日本にならなければいけないと思う」と訴えた。18年間の議員生活を支えた元秘書の染谷正圀さん(66)は「国民への遺言だと思います」と話した。(中村史郎)